

# Outward Bound とその心理的効果に関する文献研究

赤井利男 飯田 稔

## Outward Bound and the Psychological Effects: A Review of Literature

Toshio AKAI and Minoru IIDA

During the past decade, increased interest in Outward Bound has been found and a number of Outward Bound School has been established in the world. The purpose of this paper is to introduce the philosophy, developmental process, and programs of Outward Bound School, to review recent literature on Outward Bound studies, found mainly in the American doctoral dissertations and master's theses, and then to discuss the implications of it to outdoor recreation and education in Japan.

Outward Bound is originally based on the Kurt Hahn's educational philosophy, and was established in 1941 in England. The main aim of Outward Bound is a character development, such as moral, judgement, and strong character, for youth by involving them in continuing series of challengeable and risk-taking activities in the outdoor setting. The Standard course, which lasts for four weeks, serves to 16 to 20 years old people. Depending on the geographical location and conditions, Outward Bound programs usually include such activities as canoeing, sailing, mountaineering, skiing, etc. The typical programs cover four progressive stages: 1) on-base basic physical conditioning and outdoor skill development, 2) learning of outing sports skills in the wilderness setting with supervision, 3) experiences in the wilderness with limited supervision, and 4) the course evaluation.

One of the most characteristics of Outward Bound program is found in 'Solo Experience' in which the participants stay alone in the remote setting with a minimum of food and shelter for 72 hours.

Research on Outward Bound programs has focused upon its effect on self-concept, including such words as self-awareness, self-confidence, self-actualization, etc. The summary of findings showed positive directions as a whole, though some changes were not statistically significant. Based on the literature reviewed, methodological problems were discussed with regard to the research designs, measurements, and subjects.

Outward Bound programs had the following implications to recent outdoor-related programs in Japan: 1) Emphasis on character development of the participants as a purpose of the programs. 2) Need to provide the youth vigorous physical activity which offers challenge and courageous adventure in natural setting. 3) Extension of usual two or three days session to one or two weeks. 4) Safety education through directly facing and conquering the danger. 5) Participant's involvement in program planning.

### 1. はじめに

野外活動の特性のひとつとして、野外をダイナ

ミックに利用し、体力と動物的感覚を頼りに、大自然に挑む冒険性を挙げることができる。軟弱になりがちな都会生活とは逆に、誰にも頼ることの

できない自然環境におかれた時、人間は独力で道を切り開き、日常生活では想像できないほどの力を発揮する。そして真の自己を発見し、やればできるという強い自信を培うことができる。野外活動はそれが高度になればなる程困難や危険を伴うことが多いがこれらに対して積極的に立ち向かい、克服する態度や性格を養うことも野外活動の重要な目標のひとつである。

第2次大戦後、特に1960年代の後半から野外活動の分野で世界の注目を浴びている運動のひとつに、Outward Bound がある。Outward Bound はイギリスに生まれ、海や山の自然環境の中で、身体訓練を含む冒険的活動を通して性格づくりをめざす野外活動であり、後に述べるがわが国でも1974年に実験的に行なわれた。

本論文では、Outward Bound の理念と発展過程、プログラムを概説し、Outward Bound が参加者に及ぼす心理的効果について、その研究成果をアメリカの文献を中心に考察し、併せてわが国における野外活動への示唆を検討する。

## 2. Outward Bound の理念と発展過程

Outward Bound はユダヤ系ドイツ人教育者、クルト・ハーン (Kurt-Hahn) の教育理念にその基盤をおいている。ハーンは道徳的で、正しい判断力を持ち、強固な精神力を持った人間の育成を青少年教育の目的とし、これらの精神特性を養成する手段として厳しい身体訓練を重視した。

ナチス・ドイツの迫害によって1933年英国に渡ったハーンは Gordonstoun 学校の校長として早速身体訓練による教育を実践した。例えば、運動選手の持久力が、強い精神力を育成するのに不可欠だと考えていたハーンは、学生達に早朝、ショートパンツでランニングを行なわせ、トレーニング・プログラムの進行状況を毎日図表に記録させた。(Lowenstein, 1975)

ハーンはまた、戦争時における生存技術 (Survival Technique) や冒険体験に注目し、これを平和時の教育活動に取り入れた。青少年が種々の生存技術を習得し、実践する過程で、生命の危険に直面させることによって、青少年に生に対する正しい態度を育てるとともに、他人の生命を危機

から救出する能力を養い、他人への奉仕の精神を培うことが、平和時における生存技術教育の目標であった。同校学生の生存技術の向上を啓蒙するために、海や山の冒険旅行や人命救助で優れた業績を残した学生に与えられる「モーリー・バッジ」(Morey Badge) 制度がおかれた。(Hogan, 1971)

第2次大戦中、ナチス・ドイツ軍の攻撃による海難事故が相つぎ、若い船員の死亡率が中・高齢者の船員のそれを上回ることが報告された。(Schulze, 1971) また、Lowrence Holt によって青少年の体力と精神力の不足が指摘され、緊急事態を生き抜くことができる精神的、身体的訓練の必要性が叫ばれた。(Hogan, 1968) ここにハーンの教育理念は、当時の社会的欲求と結びつき、1941年 Wales の Overdvey に Outward Bound Sea School が創設されるに至った。したがって、この学校においては水泳訓練による生存法が強調された。

第2次大戦後、船員に対する生存訓練は、青少年に対する海のための訓練ではなく、海を通じての訓練に変わっていった。(Lowenstein, 1975)

Outward Bound の語源は次の通りである。

この言葉は、英国で船が出航する際、その24時間前に船尾に旗を上げるのが常で、その旗はその船が現在出航するための最終準備をしていることを表示するものであり、それを Outward Bound という名で呼んでいた。即ち新しく設立されたこの学校も、若者たちが社会人として独立する直前の最終教育であり、その目的が良き社会人となるための強い精神力と肉体を養い、奉仕と愛を理解できるよう考えられていることから、つまりこの学校の目的が「人生の旅立ちの準備」とも言えることから、Outward Bound School と名付けられたのである。(日本青年会議所青少年開発委員会, 1977, p. 17)

1946年、Outward Bound 財団が学校の総括機関として創設され、1950年、海に対するものとして、山を中心とした Outward Bound Mountain

School が Eskdale に作られ、登山プログラムの位置付けを行なった。これ以後、各地に学校が作られ、1963年、Rhowniar に女子専門の学校が作られた。現在英国には 6 つの Outward Bound School がある。(Fletcher, 1971)

1951年ナイジェリアに英国以外の初の Outward Bound School が設立された。1975年現在、アフリカには、ナイジェリア、ケニア、南アフリカ、ザンビアの 5 ケ国に 6 つの Outward Bound School がある。アフリカの Outward Bound の特徴は、社会開発と社会奉仕に重点を置き、国家の統一をめざして種族、宗教の違いに対する偏見をなくする努力をしていることである。ケニア Outward Bound School がケニア、ウガンダ、タンザニア政府の援助を受けて、3 国からの 7 名の盲人参加者をキリマンジャロ登山に成功させたこともそのひとつの表れである。(Fletcher, 1971)

野外活動の伝統を誇るアメリカでは、1962年にコロラド Outward Bound School が設立された。アメリカの Outward Bound は短期間に顕著な発達を遂げ、1971年現在 7 校が開設されている。(Schulze, 1971) アメリカにおける発達の背景として、1) 野外における集団生活が教育の場として長い間認識されていたこと、2) 組織キャンプ (Organized Camp) の対象は小中学生が主で、青年を対象とした組織的な野外教育活動がなかったこと、3) 事故とその補償を恐れるあまり、自然への挑戦や冒険の機会が減少しつつあったこと、4) 新聞・雑誌・テレビ等のマスコミによるセンセーショナルな表現が人々の Outward Bound に対する関心を高めたこと、が考えられる。Outward Bound の理念は現在では組織キャンプ (Organized Camp) にも影響を与え、修正 Outward Bound (Modified Outward Bound), キャンピング・アドベンチャー (Camping Adventure), ウィルダネス・アドベンチャー (Wilderness Adventure), アウトドアー・チャレンジ (Outdoor Challenge) 等と呼ばれるプログラムが年々増加する傾向にある。

その他、Outward Bound はマレーシア、ホンコン、シンガポール、西ドイツ、オランダ、オー

ストラリア、ニュージーランド、カナダに発展し、1975年現在で17ヶ国32校が活動している。(Metcalf, 1976)

我が国においては1973年青年会議所が10人の青年をマレーシア Outward Bound School に派遣した。この報告にもとづいて、1974年鹿児島県甕島に英国人インストラクターを招聘して14日間の実験コースを、18名の青年を対象に実施した。ひきつづき、1975年、長野県青年会議所は英国人インストラクターの指導のもとに26日間のスタンダードコースを計画し、桐池高原において山岳訓練を中心にした Outward Bound プログラムを2期実施した。(日本青年会議所青少年開発委員会, 1977)

### 3. プログラム

Outward Bound School のプログラムの原則について、Spencer (1957) は次のように説明している：

学校は長期宿泊を原則とし、コースは最少限 4 週間実施する。思想の如何を問わず、政治や宗教の偏見を捨て、いろいろな職業や国籍を持った全ての人々に開放されなければならない。学校はまた、青少年に自己発見の最初の機会を与えるため、戦争時以外ではあまり経験することのできない自律、チームワーク、冒険、身体的困難、危機、その他の諸条件を含む活動を提供すべきである。実際に興味のある訓練方法によって、学校は青少年の性格づくりに努力すべきである。(p. 29)

Outward Bound プログラムは、国によって、また学校のおかれている地理的環境条件によって多少異なっているが、長期研修、対象としての青少年、自然を利用した冒険的野外活動、目的としての自己発見と性格育成という Outward Bound の基本理念は全ての Outward Bound School、特にそのスタンダード・コースに共通している。

表1はアメリカにおける Outward Bound School コースの種類と内容の概略であるが、スタンダード・コースの他に各種の特別コースが開

表1 The course contents of the Outward Bound School in U.S.

Course	Age	Sex	Length	Cost
standard	16~20	both	days	dollors
			21	450
			23	475
			24	500
			26	550
professors in education	all	both	5	125
mini-OBS	over 21	both	12	225
junior	14~16	male	21	250
		female	21	250
senior	over 22	both	10	250
	all	both	10	250
teacher	over 22	both	26	550
sponsor	over 25	both	9	275
new employee	all	both	5	100

(日本青年会議所青少年開発委員会, 1977, p. 96)

講されていて、対象、年齢、性別、期間、参加費もコースによって違いが見られる。ここでは、スタンダード・コースを中心にプログラムを紹介する。

スタンダード・コースは、16~19才の男女青少年を対象に、21~26日間実施されている。生徒は各コース約80~110人で、10人で1グループを構成し、1~2人の指導者が担当する。学校の位置している自然条件によってその活動が決定されるが、山岳地域では登山、ロック・クライミング、カヌー、スキー、キャンプ等の山志向型活動が、海洋地域ではヨット、ボート、水泳、キャンプ等の水志向型活動が中心になっている。

スタンダード・コースを分析してみると、プログラムの流れの中に、4つの段階があることがわかる：即ち、1)基礎実技、2)実技実習、3)実技応用、4)評価である。

基礎実技の段階では、まず第一に体力づくりに重点がおかれる。期間中の激しい活動に耐えられるような体力を作り、体調を最高の状態に保つために、ランニング、水泳、オブスタクル・コースなどの活動が与えられる。これと並行して、火起

こし、小屋作り、バックパッキング、地図と磁石の使い方、救急法、食用植物、保温等の野外生活技術の講義と指導が学校内や周辺で行なわれる。

第2段階の実技実習に入ると、山岳地域の学校であれば、登山、ロック・クライミング、懸垂下降、山岳救助法などを指導者が実際の場面で教育する。これらの基礎技術をもとに、指導者を伴ったグループごとの実習旅行 (group expedition) に出かける。この段階では、チームワークとコミュニケーションが強調される。

次の実技応用の段階は、前の2段階で習得した技術を応用して、指導者の手を借りずに、参加者自身で計画を遂行するものである。これはプログラム全体のハイライトともいえるもので、4~5人の小グループで行なうものと、たった1人で実施する Solo Expedition (or Solo Experience) がある。Solo Expedition では、グラウンド・シート、ナイフ、救急セット、寝袋、懐中電燈、塩、4本のマッチ、4本の釣針と糸、笛と旗と1日分の食料という必要最少限の装備で、3日間を完全に1人だけで野外生活をする。期間中は誰にも会うことはなく、孤独と緊張と恐怖に耐え、これを克服するという非常に厳しい心理的挑戦プログラムである。連絡があるまで一定の場所に滞在するものと、一定の場所に期間内に帰る2つの形式がある。

最終段階では10km マラソンや、各種のチームゲーム、スタッフとの面接、感想文の提出などがあり、Outward Bound 経験の効果を主催者と参加者の両方の側から評価する機会となる。

#### 4. 研究成果の考察

前述したように Outward Bound が性格づくりを目的としているため、Outward Bound に関する研究は Outward Bound School 経験の自己概念 (Self Concept) に及ぼす効果に集中していて、心理学的アプローチがその大部分を占めている。自己概念は一般的には、自分の身体的特徴、能力、性格などについて本人がどのように認知しているかということで、比較的永続した自分自身についての考えである。人間の行動は、その個人が自分自身をどのように見、どのように考えるかに

密接な関連をもっていて、自己概念が個人の行動を決定するところにその重要性がある。自己概念はまた、パーソナリティ形成の中枢をなすものでもある。自己概念の定義と他の用語との区別については必ずしも明確ではない。自己概念、自己実現 (Self-actualization)、自己意識性 (Self-awareness)、自己記述 (Self-description)、自己評価 (Self-rating)、自己主張 (Self-assertion)、自尊心 (Self-esteem)、自信 (Self-confidence) などの用語がほぼ同じ意味でさまざまな研究者によって使われている。ここでは Self に関する種々の変数とパーソナリティに及ぼす Outward Bound の効果について言及する。

対象としての自己をとらえる指標として最も多く取り上げられているのが現実自己と理想自己 (Real-Ideal Self) の差である。現実自己と理想自己に差があるということは、個人がなりたいと欲している人間に自分がまだなっていないことを認めていることになる。ある程度のズレは一般的に認められるもので、よりよく自分を変えていきたいという自己成長の努力の動因ともなる。しかし、あまり差が大きい時には、自己に対するゆがんだ妥当でない自己像を持っていることであり、なんらかの心理障害の指標とも考えられる。反対に一致が見られるならば、その個人が満足や喜びを感じていることになる。現実—理想自己の測定には、形容詞チェックリスト (Adjective Check List)、意味差別法 (Semantic differential method) 等が用いられている。

Outward Bound に関する研究の歴史は浅く、1960年代後半から体系的な研究がなされ始めた。Clifford and Clifford (1967) はコロラド Outward Bound School の男子参加者36人 (年令11~19才) を対象に、Self and Ideal Descriptive Scale, Self-rating, Ward-Meaning Test を初日と最終日に実施し、現実—理想自己差の変化はわずかであったが、現実自己概念はよりよい方向に大きな変化が見られ、Self-rating にも同様の結果を得た。

Gough の形容詞チェックリスト (Gough Adjective Check List) を使って Koepke (1973) は、コロラド Outward Bound School に参加した32

名の男子、11名の女子を対象に自己概念の変容を検討した。23のACLF位尺度のうち、防御、自信、適応、支配、養育、提携、攻撃性、援助、屈辱などを含む12の下位尺度で現実—理想自己差が有意に減少した。したがって、コース終了時には Outward Bound School 参加者は自己をより高く評価するようになるし、理想の自己により近づくと結論づけた。

Kelly and Baer (1968) は、マサチューセッツ州青年補導課から、コロラド、ミネソタ、ハリケーン・アイランドの3つの Outward Bound School に送られた60人の非行少年に、現実—理想意味差別評定尺度 (Real and Ideal Semantic Differential Rating) をコースの事前、事後に測定し、10の自己概念に関する評定尺度中、3尺度「私は……である」I am、「私は……になりたい」I would like to be、「問題を起こさない少年は……」Boys who don't get into trouble、に有意差が見られたことを報告している。

現実—理想自己に関する研究結果は現実自己概念が増加し、現実—理想自己差が減少するという仮説を支持する傾向がみられ、一部分の下位尺度については明らかな有意差が見られた。

Smith (1971) と Stucky (1974) は現実—理想自己についてはではないが、ACLによる自己概念の変化の評価を試みた。Smith (1971) は男女高校生の実験群と統制群について、自信 (Self-confidence)、忍耐 (Persiverance)、協調性 (Ability to get along with others) の3つの変数を選んで実験した。ACLと16のパーソナリティ因子質問紙 (Sixteen Personality Factor Questionnaire) を事前、事後と7.5ヶ月後に実施したが、いずれの変数にも両群間の有意差は認められがたく、唯一の効果としてACLによる男子の自信の項目が挙げられた。コロラドとダートマスの Outward Bound に参加した39人の男女教師 (平均年令27才) に対する事前と9ヶ月後のACLを使った自己記述の研究で、Stucky (1974) もその効果を発見できなかった。

自己概念を測定するために、ACLと並んでテネシー自己概念尺度 (Tennessee Self Concept Scale) がしばしば使われている。TSCSにはカ

ウンセリング用と臨床・研究用の2形式があり、100項目の自己記述を5段階尺度によって回答するものである。Wetmore (1972) はハリケーン・アイランド Outward Bound School の参加少年219名を対象にTSCSを実施した。26日間のコース修了直後では、自己概念に関する10項目中9項目に有意な変化が見られたが、6ヶ月後には2項目に減少した。また、行動評定尺度 (Behavior Rating Scale) を利用した自己概念の変化にも同様の結果がみられたことを報告している。

Winkie (1976) は Outward Bound School 参加者の自己概念と道徳判断について、TSCSとRest Defining Issues Test を利用して、Outward Bound School の効果を吟味した。男女147名の参加者を対象にして、初日と最終日さらに130日後に調査を実施し、次回コース参加予定者105名を統制群とした。事前、事後テストの結果において、自己概念と道徳判断はより高い水準への変化が見られ、少なくとも130日はその効果が認められた。

TSCS を利用した研究は、Outward Bound School を通じて自己概念の変化が期待でき、この効果は比較的長期間持続する傾向があることを示している。

Smith 他 (1975) はコロラド Outward Bound School の参加者600人に対して、Outward Bound School の効果について自己主張、自尊心、自己意識性、他者受容の4尺度を含むアウトワードバウンド効果検査 (Inventory of Outward Bound Effects) を実施した。結果について1) Outward Bound コースは参加者の自己主張 (適応能力、リーダーシップ、積極性) に効果がみられた。2) 自尊心の基準を高めた。3) 他者受容に関する明らかな効果はみられなかった。4) 自己意識性に関する効果は明らかにすることができなかった。と報告している。

自己実現 (Self-actualization) に関しては、Vander Wilt (1971), Davis (1972), Leiweke (1976) がその成果を発表している。Maslow (1962) によれば、生活体が内在的に一定の能力を持ち、それを発揮したり、実現したりする要求を持っていて、その要求を充足させる活動を行なう

ことを自己実現という。彼は1) 生理的諸要求、2) 安全の要求、3) 所属と愛情の要求、4) 自尊の要求、以上に、5) 自己実現の要求を重視している。これら一連の要求は年令とともに生理的要求から自己実現の要求の方向に移動する。また、自己実現している人の特徴として、1) 現実をより適切に認知し、現実に適応する。2) 自分自身と他者を受け入れる。3) 進んで、いつも新鮮な気持ちで感謝する。4) ユーモアのセンス。5) 創造性。6) 文化への抵抗等15の規準を挙げている。前述の特性を持つ自己実現者をもとにして、Personal Orientation Inventory が作られた。

自己実現について、Vander Wilt 他 (1971) は大学生オリエンテーションの一環としてミネソタ

Outward Bound School に参加した男女各10名にPOIを実施し、Outward Bound 経験は女性の自己実現過程にのみ有意な貢献をしたことを報告している。Davis (1972) は岩登りと懸垂下降時の恐怖と自己実現との関係について評定尺度と短文記述を含む調査を実施し、恐怖の克服によって自己意識性と自己実現に変化が見られたことを示した。

Leiweke (1976) は24日間の Outward Bound 経験の自己実現過程に対する影響を検討するために、テキサス Outward Bound School の16~47才の参加者に対してPOIの3尺度、Time Competence Ratio, Support Ratio, Self Actualizing Value を用いて、自己実現の変化を初日と最終日に測定した。結果はPOIの3尺度のいずれの得点間も有意差が見られた。従って、参加者は他人に対する依存心が減少し、個人の能力が十分に機能し、自己実現した人間に特有の価値観を持つようになったことが明らかにされた。以上3つの研究結果から、Outward Bound 経験を通じて、参加者は自己実現過程を拡大させることができると考えられる。

Strutt (1966) と Foster 他 (1971) は Outward Bound School のパーソナリティへの効果を調査し、女子参加者に「安定した」の項目について変化がみられたことを両研究者が報告している。Strutt (1966) は英国の女性 Outward Bound School 参加者100人とその統制群に対して16PF

を18ヶ月後に追跡テストをして、実験群は「安定した」(.01レベル)、「信頼できる」、「批判的な」、「活発な」、「神経質でない」、「因襲的でない」などのパーソナリティ特性により高い傾向が見られたことを報告している。Foster (1971) はダートマス Outward Bound School において、ニューヨーク州立大学生17名を対象に Thurston Temperament Schedule によって7つのパーソナリティ特性「活動的な」、「元気のいい」、「衝動的な」、「支配的な」、「安定した」、「社交的な」、「反省的な」の変化を測定した。事前、事後の結果は男子はより「安定した」について増加を示し、女子は「安定した」と共に「元気のいい」について有意な増加を示した。また、平均パーセンタイルは男子の社交的特性と女子の活動的特性を除く全項目に増加の傾向が見られた。

自己やパーソナリティを中心に、その研究成果を考察したが、その他の変数として非行少年の再犯率 (Kelly and Baer, 1968, 1974)、態度変容 (Gillete, 1971; Godfrey, 1972) などの研究があったことを付け加えておく。

Outward Bound School を取り扱っている研究成果は総体的に Outward Bound School の効果を立証していると考えられるが、次のような研究上の問題点を考慮した上で結論づける必要がある。

1) 吟味した15の論文のうち、その $\frac{2}{3}$ の研究が統制群を持っていない。1つの集団に対して事前、事後の比較を行なう研究方法 (one-group pre and post design) はパイロット・スタディとしては役立つが、効果を評価する実験法としては満足のゆくものではない。

2) 測定については、標準テストが使われているが、Outward Bound School 参加者の特殊性が考慮されてないし、内容の妥当性の点でも Outward Bound School 経験に必ずしも適当とはいえないものも含まれてくる。研究者はその研究目的にそって、下位尺度や項目を選択、修正し、できれば自分でテストを創り出せばより効果的である。この点、スタッフとの面接、プログラムの分析、文献研究にもとづいて創られた Smith (1975) の Inventory of Outward Bound Effects

は参考となる。

3) 対象人数が極端に少ない場合には、その結論は疑問視され、一般化に必要な最少限の被験者が必要である。

4) 研究の大部分は Outward Bound School 参加直後に事後テストを行なっているが、正しい効果の判定はどの時期に行なわれるべきか、考慮する必要がある。また、持続的效果を評価するために、追跡研究がより多くなされなければならない。

5) 同一測定方法を使った研究でも、学校によってその効果が異なったり (Kelly and Baer, 1968)、コースによって異なる効果が出ている (Smith 他, 197.)。これらの結果から、参加者の質の相違の他に、コース内容や指導者の質や指導法などにもかなりの差があるように思われる。

## 5. おわりに

Outward Bound の理念、発展過程、プログラムそして効果についての考察をしてきたが、Outward Bound はわが国の野外活動に多くの貴重な示唆を与えていると考えられるため、その幾つかを列挙する。

1) 文明社会のひずみが生みだした人間性の欠如は、知的教育よりも性格教育によって回復することができるのではなからうか。Outward Bound の性格教育の目的は、わが国の野外活動における知識や技術習得中心のあり方に反省の機会を与え、野外活動が青少年の性格教育に及ぼす影響力を再認識させるとともに、目的としての性格教育の重要性を強調することを示している。

2) 野外活動の内容として、ともすれば歌、ゲーム、フォークダンスといった簡単にできて楽しそうに見える活動が定着しつつあるなかで、野外において真に追求されるべき活動は何かという問いに対して、Outward Bound に見られる厳しい身体訓練と自然への挑戦がその答えを出しているように思われる。よりよく自然を知り、自己を知るには、自然と人間との直接の触れ合いが必要であり、それは大自然における冒険や挑戦活動の中に見い出されるのではなからうか。

3) Outward Bound School のスタンダード・

コースの期間は21～26日である。ふりかえってわが国の野外活動期間は4日以内のものがその大部分を占めている。プログラムを効果あらしめるには、現在のプログラムから長期のものに変えてゆく必要がある。その点では、国土庁が検討している「セコンド・スクール構想」は最低2週間から普通1ヶ月間学校を離れて野外教育カリキュラムに従事するものであり、Outward Bound Schoolの理念を活かせる可能性を含んでいる。

4) 安全教育は、危険な場所からいつも逃避するだけでなく、優れた指導者のもとで、実際に危険に直面し、克服するところに真の安全教育がある。野外活動の事故を恐れるあまり……それはしばしば死につながるので、危険をあまりにも避け過ぎる傾向がある。安全教育が野外活動のひとつの目標であるならば、何が危険かをも教育し、それに対処できる知識と技術を教育する必要がある。

4) Outward Bound Schoolの指導方法を分析してみると、参加者が知識や技術を習得し、成長する過程に応じて、指導者自身がその役割を少しずつ変化させている。そして最終的には、参加者自身で計画し、行動させることをねらっている。人間、特に青少年は自分達で計画したことには、強い情熱と責任感を持って臨むであろう。わが国の野外活動のプログラミングの段階で、参加者が参画する機会がもっとあってよいのではないか。

最後に Outward Bound School がわが国に定着するには、必ずしも社会的条件が整っているとはいえない。特に26日間という長期にわたる活動に参加するには、時間的、経済的な困難が予想される。1週間から10日程度の短期特別コースを開設し、活動を多様化するよりひとつの技術を基礎から応用段階まで深く習熟するという方向に向かうほうが導入しやすいのではなからうか。なお、指導者の養成及び望ましい施設、用具の確保も同時に急務となるであろう。

#### 引用文献

- 1) Clifford, Edward and Clifford, Miriam: Self concepts before and after survival training, British Journal of Social and Clinical Psychology, 1967, 6(4), Pp. 241-48.
- 2) Davis, Robert W.: The fear experience in rock climbing and its influence upon future self-actualization. Doctoral dissertation, University of Southern California, 1972.
- 3) Fletcher, Basil A.: The Challenge of Outward Bound. London: William-Heinemann Ltd., 1971.
- 4) Foster, Herbert L., Debacy, Diane, Lockerman, William and Bartoo, Roy: An analysis of an Outward Bound experience and its relation to teacher education. Office of Teacher Education at the State University of New York at Buffalo, 1971.
- 5) Gillette, James H.: A Study of attitude changes as a result of Outward Bound Mountain School, C-20. Doctoral dissertation, University of Northern Colorado, 1971.
- 6) Godfrey, Robert J.: Outward Bound, A model for educational change and development. Doctoral dissertation, University of Northern Colorado, 1972.
- 7) Hogan, J.M.: Impelled into Experiences. Educational Productions LTD. E.P. Publishing Company, London, 1968, pp. 12-27.
- 8) Kelly, Francis J.: Outward Bound and Delinquency. A ten year experience. Paper presented at Conference on Experimental Education, Estes Park, Colorado, October, 1974.
- 9) Kelly, Francis and Baer, Daniel: Outward Bound Schools as an alternative to institutionalization for adolescent delinquent boys. Boston, Massachusetts: Fandel Press, 1968.
- 10) Koepke, Sharon: The effect of Outward Bound participation upon anxiety and self-concept. Master's thesis, Pennsylvania State University, 1975.
- 11) Leiweke, John T.: The influence of the Twenty for day Outward Bound Experience on Self-Actualization. Doctoral dissertation, Saint Louis University, 1976.
- 12) Lowenstein, D. H.: Wilderness Adventure Program. Department of Man-Environment Relations. The Pennsylvania State University, 1975, Pp. 3-5.
- 13) Maslow, A. H.: Toward a psychology of being. Princeton, N. J., Van Nostrand, 1962.
- 14) Metcalfe, John, A.: Adventure Program. National Educational Laboratory Publishers, Inc., 1976, p. 8.
- 15) 日本青年会議所青少年開発委員会. アウトワード・バウンド・スクール, 日本青年会議所, 1977.
- 16) Schulze, Joseph, R.: An Analysis of the Impact of Outward Bound on Twelve High Schools. Outward Bound Inc, Reston, Va. 1971, Pp. 1-6.
- 17) Smith, Mary Ann W.: An investigation of

the effect of an Outward Bound experience on selected personality factors and behaviors of high school juniors. Doctoral dissertation, University of Oregon, 1971.

- 18) Smith, Mary L., Gabriel, Roy, Schott, James, and, Padia, William L.: Evaluation of the effects of Outward Bound. Boulder, Colorado: Bureau of Education Field Service, School of Education, University of Colorado, 1975.
- 19) Spencer, Summers: The History of the Trust. In *Outward Bound*. ed. David James, London: Routledge and Kegan Paul, 1957, pp. 18-58.
- 20) Strutt, Betty E.: The influence of Outward Bound courses on the personality of girls, *Research in Physical Education (Great Britain)*, 1966, 1(1),
- 21) Stucky, James M.: Changes in self-descriptions of teachers as a result of Outward Bound experience. Doctoral dissertation, The American University, 1974.
- 22) Vander Wilt, Robert B. and Klocke, Ronald A.: Self-actualization of females in an experimental orientation program, *Journal of the National Association of Women Deans and Counselors*, 1971, 34, pp. 125-29.
- 23) Wetmore, Reigh C.: The influence of Outward Bound School experience on the self-concept of adolescent boys. Doctoral dissertation, Boston University, 1972.
- 24) Winkle, Philip A.: The effects of an Outward Bound School Experience on Levels of Moral Judgement and Self-concept, Doctoral dissertation, The State University of New Jersey (New Brunswick), 1976.